

アカデミックデイ 2019・勝手連ポスターへの訪問ありがとうございました (佐藤 恵子)

9月15日(日)の京大アカデミックデイ「研究者と立ち話」における私たちのポスター「これで安心? 細胞・情報を使う研究」には、多くの方に足を止めていただきました。ありがとうございました。

私たちは、人の生き死に関する問題を解決すべく取り組んで(こねくりまわして)おりますが、そのうちの一つに、診療のために患者さんから採取した組織など(ヒト由来の試料・情報)を使って研究をする際、みなさんに「使っていていいよ」と言ってもらうためには、何をどうすればよいかを考え、病院での実践策を立てるという課題があります。試料や情報は、もともとは患者さんに属するものですので、みなさんが、細胞や情報、身体やいのちをどう捉えているかという、理屈ではない心情の部分や、研究者に何を求めているか、研究の対象になることに対して何を危惧するか、というところを聞かせてもらう必要があります。

そして、今年のアカデミックデイでは、「採血の残りを研究に利用してよいか」と声をかけられたらどうするかたずねたところ、ほとんどの人が「使用してよい」、研究者に対しては「クローンなどの不気味な研究には使わないでほしい」「意義のある研究をしてほしい」などを求めていることがわかりましたので、今年は「身体から離れた細胞・組織はどのように位置づけるか」「研究実施の状況や成果を知りたいか」などもたずね、具体的なルールを考えることにしました。細胞や組織のとらえ方は、「ただの細胞」から「自分の分身」まで、意見はさまざまでしたが、研究の内容や成果は「知らせてくれなくてよい。病院のHPにあって、調べようと思ったら調べられる程度でよい」というご意見が多数でした。その反面、「研究者は大多数はきちんと研究をしていると思うが、一部には不正する人がいる」とのことで、「ルールを紙に書いて見えるようにしておくことが大事である」「ルールは、研究者の好き勝手な内容になっていても困る」という意見も得られました。他にも、「自分にとってメリットがあって、技術的にも可能なら、個別に進捗や成果を知らせてほしい」というご意見もありました。

これらを踏まえると、みなさんは、意義のある研究を実施することや、方針やルールを作って研究者が従うことなどが重要と考えていることになり、研究実施側がやるべきことも見えてきました。そして、中には、「採血の残りなどは、捨てるものと思っていました。取っておいて使うのですね」「このように研究が行われていること自体を知ることができてよかったです」という人もおり、「病院で、残余試料や既存試料を使った研究がどのように行われているか」を、世の中に見えるようにするのが大切であることを実感しました。

このような市民の生の声を聴かせてもらえる機会はたいへん重要で、多くの気づきを頂戴することができて、ありがたかったです。朝から夕方までしゃべりっぱなしで声は枯れ、足は棒になりましたが、楽しい時間でした。

また、生命倫理学の問題そのものに興味を持ってくださったり、私たちがやろうとしていることに理解を示してくださる方も多く、活力が湧きました。学内の研究者や市民と出会う機会を継続して設けていただいていることに加え、特に準備や当日の運営に尽力くださった URA とスタッフのみなさま方にも、心より感謝申し上げます。